

2023年9月17日 説教「エルサレム会議」

使徒の働き 15章 1～11節

第一回伝道旅行を終えたパウロとバルナバはアンテオケにおいて、人々に伝道の報告や証しをして、次の宣教に備えていました

### 1. モーセの慣習を重んずる人々 (1～3節)

①割礼を受けなければ (1)「さて、ある人々がユダヤから下って来て、兄弟たちに、『モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない。』と教えていた。」

ユダヤ人クリスチャンと思われる人々が、ユダヤからアンテオケにやっ  
て来て、異邦人でクリスチャンになった兄弟達に言ったのです。「あなたがたは、モーセの記した書の慣習に従って、ユダヤ人と同じように割礼を受けなければ、救われません。」

②激しい対立 (2)「そしてパウロやバルナバと彼らとの間に激しい対立と論争が生じたので、パウロとバルナバと、その仲間のうちの幾人かが、この問題について使徒たちや長老たちと話し合うためにエルサレムに上ることになった。」

しかし、彼らの理屈は、異邦人伝道に取り組んできたパウロやバルナバにとっては受け入れがたいものでした。そこで、両者の間に激論が交わされることになったのです。しかし、結局は埒が明かず、パウロ達は、この重要テーマについて、使徒達や長老たちと話し合うために、エルサレムに向かうことになったのです。

③通る道々でも (3)「彼らは教会の人々に見送られ、フェニキヤとサマリヤを通る道々で、異邦人たちの改宗のことを詳しく話したので、すべての兄弟たちに大きな喜びをもたらした。」

パウロ一行は、アンテオケ教会の人々に見送られ、エルサレムにつながる道を進みました。行く道の途中、フェニキヤ地方やサマリヤ地方を通る時にも、彼らは伝道しました。特に、伝道旅行において、多くの異邦人達がクリスチャンになった事を証しました。すると、そこにいた異邦人クリスチャンを含めた兄弟達は、大いに喜んだのでした。

### 2. エルサレムでの会議 (4～6節)

①エルサレムに着き (4)「エルサレムに着くと、彼らは教会と使徒たちと長老たちに迎えられ、神が彼らとともにいて行なわれたことを、みなに報告した。」

エルサレムまでの距離は約 650 キロ。彼らがエルサレム教会に着くと、出迎えがありました。教会の人々、使徒達、長老達に迎えられた後に、パウロ、バルナバは、伝道旅行において、神が終始共にいてくださり、多くの異邦人が救われたことなどを報告したのでした。

②元パリサイ派の主張 (5)「しかし、パリサイ派の者で信者になった人々が立ち上がり、『異邦人にも割礼を受けさせ、また、モーセの律法を守ることを命じるべきである』と言った。」



しかし、元はユダヤ教のパリサイ派で、クリスチャンになった人々が意見を述べました。彼らは信者となった者が割礼を受けること、十戒を中心としたモーセの律法を守ることを条件に加えることは、ゆずれませんでした。ユダヤ教的発想から抜けられなかったのです。

③使徒と長老は集まり (6)「そこで、使徒たちと長老たちは、この問題を検討するために集まった。」

そんなことから、このことを議題とする会議が開かれることになったのです。使徒達、長老達とパウロとバルナバ達がそこに参加したことは言うまでもないことです。これがエルサレム会議です。キリスト教会にとっては初めての教会会議と言っても良いでしょう。

3. ペテロの説得 (7~11 節)

①ペテロは立ち (7)「激しい論争があって後、ペテロが立ち上がって言った。『兄弟たち。ご存じのとおり、神は初めのころ、あなたがたの間で事をお決めになり、異邦人が私の口から福音のことばを聞いて信じるようにされたのです。』」

ユダヤ人クリスチャンの極右の人々の意見に対し、パウロとバルナバの意見はどんなものだったでしょう。それは小アジアにおける伝道旅行に基づくものでした。異邦人が救われ、生き生きと歩んでいる様子を伝えるとともに、彼らに割礼を施すことや律法遵守を強いることは正しくないと述べたことでしょう。そして、ついに最後に語り出したのが、使徒ペテロでした。彼はカイザリヤの科尔ネリオという百人隊長が神の恵みによって救われていった一部始終を経験し、これまでも証していました。異邦人が救われることを、早くからペテロは認めていたのです(10章)。

②異邦人にも聖霊を (8~9)「そして、人の心の中を知っておられる神は、私たちに与えられたと同じように異邦人にも聖霊を与えて、彼らのためにあかしをし、私たちと彼らとに何の差別もつけず、彼らの心を信仰によって、きよめてくださったのです。」

ペテロは強調したことは、神は異邦人でもキリストを信じた者には聖霊が注がれるということでした。さらに神はユダヤ人と異邦人との間に何の差別もなく、彼らの信仰に従って、彼らをきよめてくださったということも強調して語りました。

③神を試みようとする (10~11)「それなのに、なぜ、今あなたがたは、私たちの父祖たちも負いきれなかつたくびきを、あの弟子たちの首に掛けて、神を試みようとするのです。私たちが主イエスの恵みによって救われたことを私たちは信じますが、あの人たちもそうなのです。」

ペテロは訴えます。異邦人クリスチャンもユダヤ人クリスチャンと同等であるのなら、なぜユダヤ人達も負いきれなかつたくびきを負わせ、苦しめようとするのですか。それは神を試みることでもあります。ユダヤ人が救われたのも異邦人が救われたのも、主イエスの恵みによるのですと。

《結論》

教会にとって、会議は何を意味するのでしょうか。ある人は言うでしょう。会議などをする暇があるならば、伝道した方がよい、祈った方がよい、慈善活動をする方がよい…。実際、会議というのは時間がかかります。長老教会においては、大会会議が年に一回、中会会議が年に二回(以前は三回であった)あります。また、地域教会においては、年に一回の信徒総会があり、毎月小会や執事会があります。それぞれの会議には役割がありますが、共通している点があります。それは、その会議において、所定の議題について、意見を出し合った上、最終的には挙手などにより決議をするということです。長老教会では、その決議のなかに、主の御心があると信じ、それに基づいて宣教や活動をなしていきます。そうすると、ある人は言うでしょう。それでは国会などと同じではないですかと。その言い方は違って、西洋においては、長老教会の会議の仕方を、国などが習って議事をするようになったのです。そして、日本の国会などは西洋からそれを学んで議事を進めているのです。確かに、少数意見にも貴重な点があることも事実ですが、群れがその時点において、主の御心を求めた時に、多数決のなかにそれは明らかにされるのです。

さて、パウロとバルナバは、小アジア地域の人々に福音を伝え、異邦人にも積極的に伝道しました。その結果は、異邦人が次々とクリスチャンになり、聖霊の働きというものも見たことでした。それはまさに主の働きだと彼らは認めたのです。ところが、ユダヤ人クリスチャンがアンテオケにやって来て、異邦人クリスチャンも割礼を施し、律法を守るべきだと訴えかけたのです。この件について、パウロとバルナバは彼らと激しく論議をしました。しかし、事は収まらず、パウロとバルナバは、異邦人クリスチャンの救いの問題を会議で決着してもらうためにエルサレムに上ったのです。白熱した議論が交わされましたが、ユダヤ人クリスチャンからも、パウロやバルナバからも信頼されているペテロが立って語りました。ペテロも 10 章に記されている夢を見るまでは、異邦人クリスチャンをそのまま受け入れることは難しかったのです。しかし、それがまさに神からの啓示であることを受け入れました。そして、百人隊長の科尔ネリオたちが救われた時に、彼らに聖霊が働いていることを彼の目で見たのです。その結果、彼は異邦人にも主は働いてくださることを確信しました。ペテロが語ったことは説得力がありました。双方の議員たちが、その言説を受け入れました。会議の決議に向けて、方向を示したと言えましょう。

私たちは今朝の聖書箇所から、何を学ぶことができるでしょうか。私たちも会議を用いて教会の建て上げをしています。そこで決議されることは教会の働きに一定の方向性を与えます。どうせ人間の会議が決めたことだろうと言ってはなりません。会議に神様が働いてくださるのです。だから、その会議の議論を導いてください。そして、その会議を通して、主の御心を示してくださいと祈っていかねばなりません。また、御心が示されたときに、教会と連なる者たちはそれに従っていかなければならないのです。従う心が与えられますように。そのようにして、教会の働きが祝福されるよう祈っていくのです。